目を上げて

主教　ルカ　武藤　謙一

日本聖公会第六十二（定期）総会が六月に開催されました。幾つもの議案が審議され可決されましたが、わたしたちの礼拝生活にとって大切な決議の一つは、堅信前の陪餐が可能になることです。実際には来年一月の実施を目指し、主教会からメッセージやガイドラインが出されることになっています。これまでは堅信を受けた者、あるいは主教の特別な許可を得た者でなければ陪餐できませんでしたが、洗礼を受けた者は堅信前でも聖餐に与ることができるようになるということです。もちろん、その前に一定の準備が必要です。子どもでしたら、小学校に入学するくらいの年齢になったら準備をしたうえで陪餐することができます。幼児洗礼を受けたまま成人になった方もふさわしい準備をして堅信前でも陪餐することができます。昨年四月に『「堅信前の陪餐」を巡るQ&A』というブックレットが各教会に配られていますので、ぜひもう一度よくお読みください。

そこでお願いがあります。お子さんのおられる方は子どもたちを積極的に主日の礼拝に出席させてください。また礼拝に来た子どもたちを温かく迎えてください。日曜学校だけでなく、子どもたちも一緒に聖餐式、み言葉の礼拝に参加することが大切です。子どもたちにとっては難しく退屈に思える時間かもしれません。静かにしていることができないかもしれません。うるさいと感じる人もいるかもしれません。静かで厳粛な礼拝を望んでいる人もいるでしょう。しかし主日の礼拝、特に聖餐式は神の家族の共同の食事です。大人だけでなく子どもたちもそこに招かれているのです。ときどき陪餐になったら聖堂に来て祝福を受け、すぐに聖堂から出ていく子どもがいます。サーバーをするとか、聖書朗読をするとか、何か役割をもって礼拝に参加することなど考えられないでしょうか。

子どもたち、その両親が遠慮することなく喜んで参加できる礼拝にするために、信徒と教役者でともに話し合ってください。

震災ボランティアに参加して

宮崎聖三一教会　大島　優子

五月末から三日間活動に参加した。と言っても高齢者のやることだからたかがしれている。他のメンバーに迷惑をかけない、足手まといにならない。これは守らなければならない私の優先第一の心がけであった。

バスで宮崎を出発、三時間を経て熊本市内に入る。ところが降り場を間違え、村上兄に迎えをお願いした。優先第一の心がけはもろくも崩れた。

ボランティアセンターに到着したのは十時前、活動一日目。

柴本室長から教会の被害状況をお聞きした。震災直後の悲惨な状況の納骨堂は整理されていた。心理面でも大変な労力を費やされたであろう方々のご奉仕に感謝する。

昼食後、これからの動向、自己紹介、又ボランティア保険に加入するための手続きを行い、益城町へと車で向かった。ヘルメットを装着、ネームを腕に付け、被災地で出会った人達に配る飲み物等準備するものは多い。参加者は二班に分かれ、それぞれが被災者に声かけをしながら四、五キロは歩いただろうか。その間手つかずと思われる崩壊した建物、牛舎と思しき場所には息づくものを感じない。廃墟と化したその中を人の気配を求め声かけをしていく。少しでも被災者の気持ちに近づくために。

二日目、朝食後の説明で崩落したブロック塀の瓦礫が道路わきに積み重ねてあるという。それを撤去し集積場まで運ぶというものであった。現場に着くと二トンダンプとトラックが用意されていた。金属製のバケツに砕けたブロック片を詰め込む人、ブロック一個二個とトラックまで運ぶ人、ただ車の往来が多いため、私は優先第一の心がけを意識しながら慎重に作業を行った。

それでもトラックの上で作業中転げそうになり、情けない気持ちを抑え、何事も無かったようにやるべき作業を続けた。ボランティアとしてのプライドが少しだけ頭をもたげた出来事だった。

三日目、活動最後の日。私が夕方のバスで帰るということで、昼に一旦センターに戻ることになった。午前中は益城町での最後の作業になる。その日も庭に砕け散ったガラス破片などを取り除き、又ソファー等ゴミになってしまった生活用品、壊れた側溝のコンクリート片等を積み込み、集積所まで運んだ。集積所は学校運動場の数倍はある広さ、多くの人がマスクをつけ、むせかえるようなほこりと暑さの中で作業をこなしていた。

一生懸命今を乗り切る力強い被災地の姿を見たおもいだ。昼過ぎセンターを出る前、たくさんのお世話になった方々にお礼の挨拶をすることで、いったん私のボランティア活動は終わった。

《嬉しいこともありました。弁当を買いに行き、「ありがとうございます。お疲れ様です。」と店員さんに言ってもらえ、又撤去作業後、家の方からカキ氷を貰ったこと等。又参加することで、九州教区外の人達との会話もあり、これも嬉しいことでした。》